

は1巻で良い寸法精度が得られるものもあるので、一概にはコストが高いとはいえない。浮き上り量、使用に際しての簡便さ、コストを総合して考えると、キャスト

ングリボン、ニューアスベストリボンが良いと考えられる。

17. 金銀パラジウム合金の耐蝕性に関する研究

—軟化熱処理時の組織像—

西村英一，澤田教彰，井上龍一郎
広瀬由紀人，中岡敬三，北村修一
白井伸一，坂口邦彦

(歯科補綴II)

日常の補綴診療においてもっとも使用頻度の高い材料に12%金銀パラジウム合金がある。これは、口腔内における通常的环境下では十分な化学的安定性を有するが、口腔内環境の状態によっては装着物の黒変や歯質や歯肉の変色、着色等さらに生体への影響を与えたとの報告もなされている。そこで今回、12%金銀パラジウム合金の耐蝕性を検索するべく、実際、日常臨床の技法に即して行った軟化熱処理時の組織像の変化について走査型電子顕微鏡による観察および、X線マイクロアナライザー(エネルギー分散型、波長分散型)での解析を行ない、比較検討した。

実験に使用した12%金銀パラジウム合金は、石福社製ニュー金パラジウム、三金社製サンキン パラトップ™ 12インレー用の2種である。

組織像検索のための試料は、これらを遠心鋳造機にて

通法に従い鋳造し、熱処理を行った。熱処理の温度条件は、700, 800, 850°C。時間条件は、メーカー指定、その2倍、4倍を設定した。組織像の検討は、As Castの状態をコントロールとし、SEMにより表面観察を行い、合金組織像の変化を比較し、さらに、パージンメタルからEDXで定性分析を行い、検出されたAU, Ag, Cu, Pdの4種類について、WDXで各元素について確認し、観察した結果、

1. 熱処理時の時間と温度の変化により、組織構造が異なることを確認した。
2. この実験系で得られた比較的均一な元素分布配置を取る組織の熱処理の条件は、ニュー金パラジウムでは、850°C, 60分、パラトップでは、800°C, 40分であった。
3. 熱処理の条件により組織像に差異が認められ、この差異が耐蝕性に影響を及ぼすことが推測される。

18. 常温重合レジンの金属接着強度

堤浩一郎，鶴島茂幸，越智守生
上埜由紀子，柳谷昌士，伊藤 仁
澤田教彰，日景 盛，坂口邦彦

(歯科補綴II)

従来より、補綴臨床に常温重合レジンが用いられている。しかし、常温重合レジンには金属に対する接着性を備えておらず、操作部位によっては辺縁封鎖性や接合部の強度的問題もあり、その性質の向上が望まれていた。最近では4-METAを用いた金属接着性常温重合レジンが臨床で応用されているが、4-METAとほぼ同じ成分を含有する溶液を金属面に塗布することにより、金属接着性のない各種の常温重合レジンと金属を強固に接着させるというアクリルボンドが製品化された。

今回は、コバルトクロム(スマロイコバルト)、ニッケルクロム(デントニッケル)、金銀パラジウム合金(キャストパラジウム12)に対する常温重合レジン(アドファ、メタファスト)と、本剤及び従来からの4-META系Bonding Linerを使用した場合の接着性における効果を、アドファをコントロールとし、メタファースト+4-METAボンディング剤、アドファ+アクリルボンド、メタファースト+アクリルボンドのそれぞれの組合せで、溶着用陶材の溶着力の判定として一般に行われている打